



神戸親和女子大学での11年間に感謝

新保 真紀子

1. 親和での11年間

早いもので、神戸親和女子大学で11年間お世話になった。教職員の方々と学生たちとの大学生活を振り返ると、感謝の気持ちでいっぱいである。

私は大学卒業後26年間、校区に同和地区や児童養護施設のある中学校数校で、社会科教師として勤め、その後、大阪府の人権教育の研究機関で8年間勤めた。中学教師時代は、マイノリティの子どもや保護者から多くのことを教えられ、まさに「先生にもらった」と思う。また、人権教育研究機関勤務中は教育と運動と研究の間をつなぐ仕事も多く、学校園のアクションリサーチから、「小1プロブレム」と名付けた課題研究にとりくんだ。それ以来20年間、小1プロブレム研究に携わり、その克服の手立てとして保幼小連携を視野に入れたスタートカリキュラム等を提案してきた。今、文科省も小1プロブレムという用語を使って、スタートカリキュラムなど、その対応策を進めてきていることをうれしく思う。

続いて勤務した神戸親和女子大では、教師を目指す学生たちとの出会いが実に新鮮で、教えることの喜びとともに学びあう楽しさを、再び感じる事ができた。教師の卵をヒナに孵す仕事は、私に再び教師としての喜びを与えてくれた。つくづく、私は教師という仕事が好きなんだと、この年にして再認識させられた思いだ。

こうしてここに、大学での11年間の振り返る機会をいただいたので、感謝の気持ちを込めて研究と教育に分けて綴ってみたいと思う。

2. 研究者として

私の専門分野は人権教育の視点をもった学校臨床学であるが、中でも小1プロブレム研究と学力格差研究がその中心である。

1) 小1プロブレム研究

人権教育機関で勤めている1997年に、小学1年生が学校文化になかなかなじめていけない問題を「小1プロブレム」と名付けて、2度にわたる大規模調査（保護者・教職員）とアクションリサーチをおこなった。主には、就学前教育と学校教育の段差にフォーカスした研究だが、大学に勤めてからは大学出版助成をいただいて、『小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』（2010年）にまとめることができた。

また、新任教師が急増する中で、いじめや不登校などの人権教育課題への理解と対応、学級集団づくりの理念や方法をまとめる必要を感じ、『子どもがつながる学級集団づくり入門』（2007

年)も出版した。これも大学出版助成をいただいた。

また、近年は、認定こども園化が進むにつれ、「タテの段差」だけではなく、幼児教育の中にある幼保の「ヨコの隔差」もシビアであることから、これをどう克服するかについて、お互いの教職員文化の共通性と異文化性にも着目した論文を数本、まとめた。

2) 学力格差と学校臨床研究

1990年代には、学力低下と学力格差問題がクローズアップされはじめた。教育社会学者たちが、家庭の社会経済的格差と子どもの学力格差に着目した調査研究を開始した。二つの地域で東大研究者による調査が行われ、関東調査では荻谷剛彦らを中心に、関西調査は志水宏吉(のちに阪大)らを中心に行われた。当時、人権教育機関にいた私は、この関西調査に協力して、大阪府内の子どもの学力・生活実態調査に関わった。欧米ではすでに確立されていた学力を家庭の社会経済的背景と関連させて分析する手法が、日本でもやっと確立された。その調査分析に関わったことは、本当に幸運だった。その分析結果は、荻谷や志水の数冊の本にまとめられている。

大学に勤めてからは、志水を研究リーダーとする「力のある学校研究」(家庭の社会経済的格差を子どもの学力格差に反映させず、学力の下支えができていない学校研究)に加わり、2度の科研費を受けての研究となった。全国小中学校の学力テスト結果の分析という膨大な量的調査に加えて、9人の研究者がそれぞれ分担して、秋田や福井、高知などの学校や教育委員会に通い詰める質的調査をおこなった。私は兵庫県担当となり、主に神戸市を中心に調査を行った。アクションリサーチは、26年間の中学教師の経験と研究者としての経験が自分の中で統合されて、おもしろかった。こうした調査結果は科研報告書や文科省報告書など数本の書物にまとめられた。私も、大学の紀要に数本の論文としてまとめることができた。

3) 海外実地研究からのスピノフ

こうした研究とは別に、学生の海外実地研究引率者として、カナダに3回、韓国に3回訪問した。せっかくの海外引率のチャンスをもらったことを研究としても生かしたいと思った。「トロントの多文化教育と子育て支援」や「韓国の幼小連携と小学校教育課程改革」をテーマとした論文にまとめた。これなどは、海外研修引率からスピノフしたおまけのようなものだが、せっかくの海外の幼稚園や小学校実地研修というチャンスを生かしたいと思い、まとめたものである。

3. 教育者として

1) 人権教育の講義を通して

大学の講義やゼミ指導では、忘れられない出会いがいくつもあった。人権教育の講義の中で、

同和地区出身者やLGBTの学生たちがマイノリティであることをカミングアウトする場面にもたびたび出会った。マジョリティの学生たちに、人権問題を「他人事」ではなく「自分事」として捉えさせるにはどうしたらいいか、懸命に考え実践してきたつもりだ。親和の学生は他者を思いやる気持ちに溢れ、共感力も豊かなので、講義の域を越えて自分の生き方にまで引き寄せて考える学生たちも多かった。授業をしながら、私が勇気づけられることもしばしばだった。本当に素敵な学生たちだと思う。

2) ゼミで

①伝統になった「9時9時」

今年正月早々に、新保ゼミ合同の同窓会を卒業生たちが企画してくれ、約120人が集まった。今年卒業する学生たちも含めると、すでにゼミ卒業生は158人となり、そのうち148人が教員採用試験に合格して、小学校の教員となった。神戸、兵庫、大阪、四国、九州、関東で、教師として奮闘している。ほかにも、大阪大学大学院後期博士課程に在籍し、現在、本学の非常勤講師として帰ってきたゼミ生もいて、いよいよバトンタッチ完了だと実感している。

新保ゼミの合言葉は「9時9時」。当初より、研究室を開放して教員採用試験の勉強をする文化を、いつのころからか、ゼミ生たちはそう呼ぶようになった。文字通り、朝から夜まで研究室にこもり、分からないところを教え合い、励まし合ってきた。苦楽を共にし、(寝)食を共にしてきた彼女たちの絆は強かった。私は時には檄を飛ばし、時には慰め、食べ物を用意して「餌づけ」しつつ、彼女たちを見守ってきた。当初は自信がなかった学生も、仲間の中でCan Do文化に染まっていく。こうした姿は、小中学校の学級集団づくりと同じだと思った。

研究室では、将来の夢だけでなくボランティア先の子どものこと、家族のこと、そして恋愛相談など多岐にわたる語り合いが続いた。一緒に流したうれし涙や悔し涙は計り知れない。私が学科長時代に疲労困憊していると見るや、学生の実家からハモ鍋セットが研究室に送られてきて、みんなで鍋を囲んだこともあった。先輩から後輩への励ましや折々の差し入れなど、タテのつながりも深く、つながりは卒業後も続いている。

②教育実践的な体験と大学での学びの往還をとおして

できるだけ、「学校の今」を実践的に体験させる必要も感じ、学校ボランティアはもちろんのこと、学生たちを学校フィールドワークや現職教員の研究会にも連れて行った。小学校での実地体験と大学での学習の往還によって学びが統合されることは、教員養成教育にとって重要だと確信している。

特にこの10年間、長田識字教室ボランティア活動にゼミとして取り組んだことも大きい。「字を識ることは、わたしの人生を生きるということ」「字を学ぶことは無上の喜び」と語られる高齢の学習者たち。一文字一文字を丁寧に大切に書きとっていきその姿に、「学びの原点」

や「人間の尊厳」を教えられてきた。まさに「教えることは学ぶこと」であった。識字教室での授業に向けた授業案づくり・模擬授業の練習・教材作りという毎週のゼミ活動は、生きた人権教育の場でもあり、教師力を育てる場でもあった。

識字展を学内で始めたのは3年前からだが、識字カルタの絵札描きを他学科の学生にも手伝ってもらったり、ゼミ生以外にも識字ボランティアの参加者が増え、学内の人権文化を広げることに、少しは貢献できたのではないかと思う。これらの取り組みは毎日新聞の全国版や神戸新聞を始め、たびたび新聞でも取り上げられてきた。

こんな風に学生とともに、最後の教員生活を過ごせた私は、つくづく幸せだと思う。まだしばらくは、客員教授として親和とおつきあいも続くだろうし、教育委員会の委員や講演活動なども、もう少し続けるつもりだ。しかし、長年のフルタイムの仕事を終えた次に、何が始まるのか、わくわくしている。60代後半の私だが、今は赤毛のアンが言った「曲がり角のむこうになにがあるか、今はわからないけど、きっとすばらしいものが待っていると信じることにしたわ。」の気分である。多くのチャンスと出会いと感動をくださった神戸親和女子大学、特に児童教育学科の教職員・学生の皆様に、心から深く、深く感謝申し上げます。お世話になりました。

(略歴)

- 1970年 大阪大学文学部史学科 卒業
- 1971年 大阪府松原市立松原第3中学校勤務 以後3校で勤務
- 1990年 大阪府同和教育研究協議会（のちの人権教育研究協議会）事務局 勤務
大阪市立大学・近畿大学・神戸親和女子大学 非常勤講師
- 2005年 神戸親和女子大学発達教育学部特任助教授（のち准教授）
- 2007年 神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター長（2010年3月まで）
- 2010年 神戸親和女子大学発達教育学部 教授
神戸親和女子大学発達教育学部発達教育学科 学科長（2013年3月まで）
同教育研究センター長・子ども教育研究所長（2013年3月まで）

(所属している学会等)

日本教育社会学会、日本子ども学会、日本臨床教育学会 全国大学同和教育研究協議会

(その他) 現在も任期中のもの

- ・大阪府教員資質向上審議会 座長
- ・大阪人権博物館評議会 評議員
- ・大阪府人権啓発詩・作文審査委員会 委員長

- ・堺市教育振興基本計画懇話会 委員

ほかに

- ・大阪府「学校における性暴力等防止対策委員会」委員
- ・兵庫県人権教育調査研究委員
- ・兵庫県学力向上実践推進委員会委員
- ・兵庫県人権教育資料検討委員会委員
- ・朝来市教育委員会教育振興計画策定委員会副委員長
- ・神戸市立学校教科用図書選定委員会委員
- ・名古屋市ソレイユプラザなごや人権展示室アドバイザー 等歴任

(研究業績)

著書 (単著)

- ① いじめを越えて 平成9年12月 解放出版社
- ② 「小1プロブレム」に挑戦する 平成13年12月 明治図書
- ③ 子どもがつながる学級集団づくり入門 平成19年3月 明治図書
- ④ 就学前教育と学校教育をつなぐ 平成21年4月 ちゃいるどネット大阪
- ⑤ 小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム 平成22年8月 明治図書

著書 (共著)

- ⑥ 校区に被差別部落のない学校園の部落問題学習Ⅱ 平成元年 大阪府同和教育研究協議会
- ⑦ 人間関係づくりとネットワーク平成9年3月 明治図書
- ⑧ 早わかり人権教育小事典平成15年12月 明治図書
- ⑨ これからの人権教育をどう創造するのか 平成15年12月 解放出版社
- ⑩ Human Rights Education in Asian Schools Volume 7 平成16年3月 Asian-Pacific Human Rights Information Center
- ⑪ 最新・人権教育ナビゲーション 平成16年11月 明治図書
- ⑫ 人権相談テキストブック 平成17年7月 解放出版社
- ⑬ わたし 出会い 発見 Part 6～人間関係作り教材実践集 平成18年3月 大阪府人権教育研究協議会
- ⑭ 高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援 平成20年7月 明石書店
- ⑮ 「力のある学校」の探究 平成21年5月 大阪大学出版会
- ⑯ 教育社会学への招待 2010年4月 大阪大学出版会
- ⑰ 『学力政策の比較社会学(国内編)—全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』 2012年3月 明石書店

(論文 単著)

- ① 大阪の同和教育と人権教育～その創生から進化を辿る
平成17年3月『人権問題研究資料』19号 近畿大学人権問題研究所
- ② 小学校社会科・身分制度成立に関する教科書記述の変遷
平成18年3月『児童教育学研究』25号 神戸親和女子大学
- ③ 高校におけるニューカマー生徒に対するサポート体制
平成18年3月
- ④ イギリスの教育改革と学校効果研究
平成18年7月 『教育研究センター紀要』第2号 神戸親和女子大
- ⑤ 「小1 プロブレム」研究の到達点とこれからの課題
平成19年3月『児童教育学研究第26号 教育専攻科紀要第11号』 神戸親和女子大
- ⑥ 幼小人事交流で見えてきた異文化としての学校文化
平成19年3月『児童教育学研究第26号 教育専攻科紀要第11号』 神戸親和女子大
- ⑦ 人権教育の今 ここから 平成19年11月
『兵庫教育』第681号 兵庫教育センター
- ⑧ 「小1 プロブレム」を越える豊かな幼小連携を目指して
『山形教育』第345号 山形教育センター
- ⑨ 現代のいじめー大阪の子ども調査を中心に
平成20年3月『児童教育学研究』第27号 神戸親和女子大
- ⑩ いじめの予防と克服 平成20年3月
『教育専攻科紀要』第12号 神戸親和女子大
- ⑪ 「力のある学校」を形成する要素～A中学校エスノグラフィをとおして～
平成20年3月『教育研究センター紀要』第3号 神戸親和女子大
- ⑫ 第2回「小1 プロブレムに関する教職員・保護者調査」-その分析と今後の課題ー
平成21年3月『児童教育学研究第28号 教育専攻科紀要第13号』 神戸親和女子大13 「く
ぐらせ期」からスタートカリキュラムへ～就学前教育と学校教育の学びをつなぐ」
平成22年3月『児童教育学研究第29号 教育専攻科紀要第14号』 神戸親和女子大
- ⑬ スクールバスモデルで検証する「力のある学校」
平成23年3月『児童教育学研究第30号 教育専攻科紀要第15号』 神戸親和女子大
- ⑭ エスニックマイノリティ多住地域における教育保育のセーフティネット
～トロント・イズリントン初等中等学校区のエスノグラフィを通して
平成24年3月『児童教育学研究第31号 教育専攻科紀要第16号』 神戸親和女子大
- ⑮ 国連「人権教育のための世界プログラム」第2フェーズにおける課題～社会科学習や人権
学習の現状と課題を中心に

平成25年3月『児童教育学研究第32号 教育専攻科紀要第17号』神戸親和女子大

- ⑯ 保幼と小の縦の「段差」と、幼と保の「隔差」克服について～認定こども園をめぐる課題を中心に

平成26年3月『児童教育学研究』第33号 神戸親和女子大

- ⑰ 認定こども園設立をめぐる幼保の文化的隔差について～インタビュー調査を中心に～ 平成26年3月『神戸親和女子大学教育研究センター紀要』第10号

- ⑱ 韓国における小学校1年生カリキュラム改革～幼保一元化と保幼小の段差縮小の取り組みを中心に～ 平成27年3月『神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要』創刊号

(論文 共著)

- ① 格差を克服する学校の一「効果のある中学校」を事例として～平成20年7月『教育研究センター紀要』第3号 神戸親和女子大
- ② 教師に求められる資質能力と教員養成のあり方～学校文化と教師役割の視点から～ 平成25年3月『神戸親和女子大学大学院研究紀要』第9巻

(報告書等 執筆分担)

- ① ニューカマー児童生徒の就学・学力・進路の実態把握と環境改善に関する研究 平成18年3月 平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- ② 大阪府内における人権相談及び人権侵害事例分析報告書 平成20年5月 大阪府人権協会
- ③ 学力向上策の比較社会学研究～公正と卓越性の確保の視点から 平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)報告書 平成23年3月

(その他 教育雑誌 掲載 50本)